

## 第 1 回

# 県立高等学校将来構想審議会

平成 2 0 年 7 月 9 日 (水曜日)

1 3 : 3 0 ~ 1 5 : 3 0

## 1 開 会

司会 本日は、お忙しい中、第1回県立高等学校将来構想審議会にご出席を賜りありがとうございます。

## 2 委嘱状等交付

司会 会議に先立ちまして、本日ご出席の委員の皆様へ教育長から委嘱状並びに辞令を交付いたします。お名前をお呼びいたしますので、その場でご起立願います。時間の関係上、委員の紹介も兼ねさせていただきますのでご了承願います。

国立大学法人東北大学大学院教育学研究科教授、荒井克弘委員でございます。

国立大学法人宮城教育大学教育学部教授、菅野仁委員でございます。

国立大学法人宮城教育大学教育学部准教授、本図愛実委員でございます。

宮城県仙台第一高等学校校長、北島博委員でございます。

宮城県農業高等学校校長、早坂公夫委員でございます。

多賀城市立多賀城中学校校長、高橋睦麿委員でございます。

丸森町長、渡辺政巳委員でございます。

気仙沼市教育委員会教育長、白幡勝美委員でございます。

利府町教育委員会教育長、小澤仁邇委員でございます。

大和町立大和中学校PTA役員、佐藤ゆり子委員でございます。

宮城県宮城第一高等学校PTA会長、猪股孝之委員でございます。

株式会社阿部長商店専務取締役、阿部憲子委員でございます。

株式会社ゼン・インターナショナル代表取締役、木村美保子委員でございます。

公平農場代表、公平伸行委員でございます。

デザインルームJIN主宰、佐々木加代子委員でございます。

財団法人みやぎ産業振興機構参与兼プロジェクトマネジャー、白幡洋一委員でございます。

社団法人東北経済連合会産業経済担当副部長、西山英作委員でございます。

なお、本日は尾崎雅健委員、朴澤泰治委員、井口経明委員につきましては所用のため欠席をされております。

それでは、ただいまから第1回県立高等学校将来構想審議会を開会いたします。

開会に当たりまして、宮城県教育委員会教育長小林伸一よりごあいさつ申し上げます。

小林教育長 開会に当たりまして一言ごあいさつを申し上げます。

皆様方には日ごろから本県教育の充実発展のためにご指導、ご協力をいただいておりますことに、まずもって厚く感謝を申し上げます。また、このたびはご多忙のところ本審議会の委員をお引き受けいただきまして、まことにありがとうございます。

この県立高等学校将来構想審議会でございますが、後ほど詳しい説明を申し上げますが、本県の県立高等学校の在り方に関する総合的かつ基本的な構想の策定について、調査、審議をいただく審議会ということで設置をしたものでございます。

現在、宮城県教育委員会では、生徒の意識の多様化あるいは少子化による中学校卒業者の減少など、高校を取り巻く環境の変化に応じた魅力と活力ある高校づくりを目指して平成13年3月に策定いたしました「県立高校将来構想」に基づき、高校教育改革を推進しているところでございます。しかしながら、今後さらなる少子化の進行や産業構造の変化が見込まれる中で、高校教育が果たすべき役割、使命もおのずから変化が求められ、また、よりよい教育環境の中で充実した教育に取り組んでいくことも大きな課題として認識をしているところでございます。そのため、平成22年度で終期を迎えます現在の県立高校将来構想の後継構想として、新たな県立高等学校の在り方を示す構想を策定し、一層の改革を図っていきたいと考えております。

委員の皆様には、これからの社会を支え、未来を創造する人づくりに向けた高校教育改革について、ぜひとも大所高所から活発にご審議を賜りますようお願い申し上げまして、簡単でございますがごあいさつにかえさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

司会 ここで、県関係職員を紹介させていただきたいと存じます。ただいまごあいさつ申し上げます。宮城県教育委員会教育長の小林伸一でございます。教育次長の三野宮斗史でございます。同じく教育次長の菅原通悦でございます。教育企画室長安住順一でございます。教職員課長の安井順一郎でございます。高校教育課長の高橋仁でございます。義務教育課長の竹田幸正でございます。施設整備課長の高橋清志でございます。

初めに、会議の成立についてご報告を申し上げます。本審議会は20名の委員で構成をしております。本日は17名の委員のご出席をいただいておりますので、県立高等学校将来構想審議会条例第4条第2項の規定によりまして、過半数の委員がご出席いただいておりますので、本日の会議は有効に成立していることをまずご報告申し上げます。

あわせて、議事に入ります前にお手元の資料の確認とマイク的使用方法についてご説明を簡単にさせていただきます。

資料でございますが、お手元に、次第、それから出席者名簿、その裏に座席表がついてございます。その後、資料として資料1から資料6まで配付させていただきます。ご不足は

ございませんでしょうか。

続きまして、マイクの使用方法についてご説明申し上げます。委員の皆様の前面にマイク装置がそれぞれございます。発言の際でございますが、大変恐縮ですが、マイクの右下のところにON・OFFのスイッチがございます。発言される際はそれを押していただいてONにさせていただきますと、マイクのところにオレンジ色のランプがつかます。そうしますと言葉が通じます。発言が終わりましたら、また右下の大きなスイッチをOFFにして切っていただくということをお願いしたいと思います。大変お手数おかけいたしますが、よろしくご協力のほどお願い申し上げます。

### 3 議 事

#### (1) 会長及び副会長の選任

司会 それでは、議事に入らせていただきます。

まず第1の議題といたしまして、会長、副会長の選任を行いたいと存じます。

県立高等学校将来構想審議会条例第3条第1項で、会長及び副会長は委員の互選によるものとされております。これから小林教育長が仮の議長ということで議事を進めさせていただきたいと思っておりますので、ご了承を願いたいと思っております。小林教育長、議事進行をよろしくお願い申し上げます。

小林教育長 それでは、仮議長ということで、当審議会のスタートに当たりまして会長、副会長の選出についてお諮りをいたします。

どなたかご推薦等のご意見ございましたらお願いしたいと思います。

北島委員 仙台一高の北島と申します。もしよろしかったら、出席者名簿にございますお一方目の東北大学の荒井委員さんを会長に、2番目の宮教大の菅野委員さんを副会長にいかがでしょうか。ご推薦申し上げたいと思っております。

小林教育長 ありがとうございます。ただいま北島委員から、会長に名簿一番上の荒井委員、それから副会長にその次の菅野委員のご推薦がございました。皆様、いかがでしょうか。

〔「異議なし」の声あり〕

小林教育長 それでは、そういうことで決定をさせていただきます。では、両委員よろしくお願いたします。

司会 では、荒井会長、菅野副会長、席のご移動をお願いしたいと存じます。

それでは、ただいま選任されました荒井会長、菅野副会長を代表しまして、早速で恐縮でご

ございますが、荒井会長からごあいさつをちょうだいしたいと存じます。荒井会長、よろしくお願い申し上げます。

荒井会長 東北大学の荒井でございます。ただいま、たいへんな大役を仰せつかりまして、責任を非常に強く感じている次第でございます。この春までは、東北大学で教育及び学生支援（教務）担当の副学長を務めておりました。その体験からも、大学教育にとって、また社会の必要とする人材養成において、高校教育が非常に重要なポジションを占めていることを痛感しておりました。審議会委員の皆様のご協力と県教育委員会の職員の方々のご協力を得まして。県立高校のこれからの10年を考えるという目的に向けて、微力ではございますが、最善を尽くしたいと考えております。よろしくお願い申し上げます。

司会 ありがとうございます。

ここで、教育委員会から本審議会に対しまして諮問がございます。教育委員会を代表しまして小林教育長から荒井会長に諮問を申し上げたいと存じます。小林教育長、荒井会長、よろしくお願い申し上げます。

小林教育長 それでは、諮問書を読み上げさせていただきます。

#### これからの県立高等学校の在り方について

このことについて、県立高等学校将来構想審議会条例第1条の規定により、別紙理由書を添えて諮問します。

理由書でございます。

本県では、平成22年度までを計画期間とする「県立高等学校将来構想」を平成13年3月に策定し、生徒の多様な個性や特性に対応した魅力ある高校づくりや開かれた学校づくりの推進、生徒数の減少に対応した学級減や学校再編、そして男女共学化の推進を図るなどして高校教育改革に取り組んでいるところです。

こうした中で、本県における総人口は、平成16年を境に減少に転じ、予想を上回る速さで人口減少時代を迎えています。また、グローバル化、情報化の中で、地域社会においても経済環境や生活環境が大きく変化しています。さらに、市町村合併の進展により、地域の有り様も大きく変わりつつあり、今後、地域経済のグローバル化の進展、地方分権の動きへの対応など、これまで以上に変化の激しい時代が到来することが予想されます。

このような社会情勢の変化は、人づくりを担う教育の在り方にも大きな影響を及ぼしています。特に高校教育においては、一人一人の生徒が、社会の形成者として、社会環境の変化に柔軟に対応できる資質や能力を育てていくことがますます重要になっています。また、生徒の興

味、関心の多様化に対応しながら、個人の能力を伸長し、自立した人間を育てていくことのできる、時代に即した高校教育の在り方が求められています。

こうしたことから、これからの宮城の地域社会を支えていく意欲や創造性等に富んだ人づくりに向けて、県立高校教育が果たすべき役割、期待される高校教育を踏まえた今後の県立高校の配置を含めた在り方などに関して多角的な見地から調査審議いただき、総合的かつ基本的な構想の策定について諮問するものです。

ひとつよろしく願いいたします。

司会 それでは、ここからは荒井会長に議事進行をお願いしたいと存じます。荒井会長、よろしく願い申し上げます。

## (2) 会議の公開について

荒井会長 それでは、引き続き議事を進めたいと存じます。

議事、2番目でございますけれども、審議会の公開について事務局からご説明お願いいたします。

伊丹副参事 それでは、お配りしております資料2をごらんいただきたいと思います。

附属機関であります審議会の会議につきましては、県の情報公開条例第19条によりまして、原則公開するという旨定められております。この公開の例外といたしまして、個人情報などの非開示情報が含まれる会議につきましては、会議の3分の2の多数決をもちまして非公開とすることが認められております。その非公開にするかどうかの取り扱いにつきましては、第1回目の会議におきまして決めることとされております。事務局といたしましては、当審議会で現在のところ非開示情報を扱うことは想定しておりません。あわせまして、県民に広く公開された場で議論を進めていただくということを考えてございますので、公開ということで開催することではいかがかと考えてございます。

あわせまして、公開とした場合に会議が円滑に進みますよう、資料の3になりますが、傍聴要領(案)をつけさせていただいておりますが、傍聴要領に基づきまして会議を公開するという事で提案をさせていただきたいと思っております。

なお、傍聴の定員でございますが、会場の大きさもございますので、適宜定員を設定してまいりたいと考えてございます。本日は、15席、15人分を設定したいと存じます。

なお、公開した会議の資料あるいは会議録につきましては、審議会等の会議の公開に関する事務取扱要綱におきまして、県の県政情報センターにおいて県民の皆様の閲覧に供することと

あわせて、ホームページに掲載をいたしまして公開するというにされております。会議録につきましては、事務局で原案を作成した後、委員の皆様にご確認いただいてから公開の手続きをとらせていただくという手順でございます。よろしくご審議を賜ればと思います。

荒井会長 ただいま事務局から説明をいただきました。何かご質問、ご意見等ございますでしょうか。

〔「なし」の声あり〕

荒井会長 それでは、質問、意見ないようでございますので、事務局の原案どおり承認することとしてよろしいでしょうか。

〔「異議なし」の声あり〕

荒井会長 皆様ご異議がないということですので、本審議会は特別の事情がない限り原則公開といたしまして、資料3のとおり傍聴要領とすることにいたします。

### (3) 新たな県立高校将来構想の策定について

荒井会長 続きまして議事(3)でございますが、事務局からご説明をお願いしたいと思います。新たな県立高校将来構想の策定についてというところでございます。

安住室長 では、事務局を務めております教育企画室の安住でございます。議事の(3)新たな県立高校将来構想の策定について私からご説明させていただきたいと思っております。資料の4をごらんください。

まず、1の策定の趣旨でございます。先ほど教育長のあいさつにもございましたように、県では現在、平成13年に策定いたしました「県立高校将来構想」に基づきまして魅力ある高校づくりの推進などに取り組んでいるところでございます。しかし、当該構想が平成22年度までの計画であることや中学校卒業者が今後も継続して減少する見込みであること、グローバル化や情報化の進展など高校教育を取り巻く環境が変化していることから、県の教育委員会では、平成23年度以降の中長期的な県立高校の在り方を示す新たな県立高校将来構想を策定することにいたしました。

次に2でございますけれども、新構想の計画期間・目標年次でございます。新構想の計画期間は平成23年度から10年間とし、目標年次については10年後の平成32年度を考えてございます。

また、新構想では、先ほど述べましたように、高校を取り巻く現状や課題を整理した上で、

今後高校教育に求められるものや社会の変化や生徒の多様化に対応した学校・学科構成等の在り方について言及するとともに、生徒数減少に対応した高校配置の在り方なども盛り込んでいきたいということで考えてございます。

新構想の策定に当たりましては、意見聴取会、アンケートの実施により広く県民の皆様のご意見なども参考にしながら、当審議会での専門的・総合的な見地からご審議を賜り、そこでまとめられた答申を踏まえながら県教育委員会が策定するという形で進めたいと考えてございます。

策定のスケジュールでございますが、当審議会では約1年をかけてご審議を賜り、答申をいただきたいと考えてございます。県の教育委員会では、その答申を参考に、来年度末を目途に新構想として取りまとめ、公表してまいりたいということで考えてございます。

なお、審議会の具体的なスケジュールでございますけれども、次のページの資料5をごらんいただきたいと思います。また審議会の間には、生徒・県民へのアンケート調査、県内各地での意見聴取会を行い、その結果も参考にしながらご審議を賜り、来年4月を目途に答申をまとめていただければ幸いとと考えてございます。

新たな県立高校将来構想の策定のスケジュールを含めまして以上でございますので、よろしくお願ひ申し上げます。以上でございます。

荒井会長 ただいまの説明に関しまして、何かご質問あるいはご意見等ございますでしょうか。

渡辺委員 スケジュールの中でアンケート調査を実施することになってございますけれども、アンケート内容について審議会で審議するのは、1回見させてもらって、そこで決めるということになるのかどうかお伺ひします。

安住室長 現在のところ、このスケジュールに書いてございますけれども、次の第2回目の審議会にアンケートの内容についてご提示して意見をもらって、9月に実施したいという形で考えてございます。

渡辺委員 その場で意見を言って修正がきくのかどうかよくわかりませんが、ただ1回でパッと見せられてアンケートでいいのかどうかというのは、ちょっと問題あるかなという気がするんですが、問題がなければよろしいんですけれども、どうお考えなのかお伺ひしたいと思います。

安住室長 その場でという形になるか、あるいは事前にでも配付して意見をもらうか、その辺のやり方については今後検討させていただきたいと思います。

荒井会長 アンケートの時期については、私も今の説明を伺ってしましてこのスケジュールで

いくのはかなり厳しいかなという感じがしています。8月にそれだけの論点整理ができればということなんだと思いますが、そこら辺、今日あるいは8月にその議論がどういうふうな形で進むかということで、多少幅を持って考えさせていただければと思います。

ほかにはいかがでございますでしょうか。

白幡（洋）委員 これからの議論で出てくるかもしれませんが、個人的な感想です。

3番目の新構想の主な内容ですけれども、丸が四つございます。確かに教育委員会から出てくるものとしては仕方がない面もあるかもしれませんが、基本的な考え方からいうと、学校というのは教育の一手段でしかないわけですから、学生を取り巻くすべてのステークホルダーといたしますか、それは社会もあり企業もあり家庭もありという面で、こういう構想を見ますとほとんどが学校に期待されるものだけが羅列されるんですが、学校が社会に、企業に、あるいは家庭教育に期待するものというのやはり当然出てくるべきではないかと。13年のものも読ませていただきましたが、すべて学校が何とかをするということばかりあるんですけれども、学生の立場から見たらそれだけではないのかなと。ですから、今後は少しお互いのステークホルダーの役割というのも明確に打ち出していった方がいいのではないかという思いがございます。以上です。

荒井会長 ありがとうございます。あと各委員からそれぞれご意見をちょうだいすることになっておりますので、今のご意見を踏まえた形でまたご発言をお願いできればと思います。

答申は来年の7月下旬というスケジュールで、これだけの大きな課題に対してちょっと期間的に厳しいかなという感じはいたしますけれども、委員の皆様のご緊密な議論を重ねてよりよい答申を出していければと思っておりますので、ご協力をお願い申し上げます。

#### （４）宮城県の高次教育の現状等について

荒井会長 それでは、続きまして議事の（４）宮城県の高次教育の現状等について、これも事務局から説明をお願いいたします。

安住室長 では、宮城県の高次教育の現状等についてご説明させていただきたいと思っております。

資料は、A4横の県立高校将来構想審議会資料の資料6を用意お願いいたします。

先に、資料の2ページをお開きいただきたいと思います。全体のグラフにつきましては、宮城県の高次の生徒数、全日高校本校の数並びに高校の進学率の推移につきまして、新制高校がスタートしました昭和23年からまとめたものでございます。黒く塗りつぶしているところは高校の生徒数の推移を示したものでございます。このグラフの上の部分に右上がりの曲線が引

かれていますけれども、これが高校の進学率の推移を示したものでございます。下に棒グラフがあります。白い部分につきましては公立高校の本校の数、黒塗りの部分につきましては私立高校の数を示しているグラフでございます。

それで黒塗りの生徒数の推移でございますけれども、山が二つありまして、昭和41年ころと平成元年をピークと二つの山がございます。これにつきましては、いわゆる団塊の世代と団塊の世代のジュニアの世代が高校生だった当時のころの二つの山になってございます。高校の生徒数につきましては、二つ目の山の平成元年のピークについては約9万人を超えていますけれども、ここをピークに減少の一途をたどってございます。このグラフの右上に現在の将来構想の期間と新将来構想の期間となっておりますけれども、現在の将来構想の期間が特に高校の生徒の減少が大きかった時期でございます。このままいきますと、一番右端になりまけれども、平成33年ころには大体6万人を割るということで、6万人といえますと、ずっと左下に示しています昭和38年ころの水準まで減少することが見込まれてございます。

今回、新たに策定する将来構想の期間でございます平成23年から32年までの期間につきましては、この生徒数の曲線から見ると割となだらかな、減少幅が小さいということになってございます。これは、多分、団塊ジュニア世代の子供たちがちょうど高校に当たる時期かということ割となだらかになっている時期かと考えますが、それでも新たな構想の期間の終期の平成32年までには、これから中学校卒業者が約3,000人の減少が見込まれてございます。また、この新たな将来構想の期間のその先でございますけれども、これにつきましても、厚生労働省の人口問題研究所の試算ではその後さらに減少のスピードが増すという形の試算が見込まれてございます。

次に、下の棒グラフでございます。全日制高校の数につきましては、昭和23年の新制高校のときに53校から出発しまして、進学率の上昇に伴いまして84校まで増加してございましたけれども、生徒数の減少期に入りまして、現将来構想の終期であります平成22年には75校まで減少するという形で今考えてございます。

これが新制高校から現在までの高校教育の大体の推移をまとめたものでございます。

次に3ページをお開きいただきたいと思います。3ページの資料は現在の将来構想の進捗状況を示したものでございます。現在の将来構想につきましては平成13年から22年までの構想となっております。構想の基本的な柱立てというのは、左の方に四つの柱で掲げてございますけれども、魅力ある高校づくりと開かれた学校づくり、学級減・学校の再編、男女共学化の推進と四つの柱で立ててございました。

まず魅力ある高校づくりでございますけれども、生徒の多様化に対応した昼夜間の定時制高校の設置につきましては、期間内に東松島高校と田尻さくら高校を設置してございます。また、中高一貫校につきましては、併設型としまして古川黎明中学校・高等学校、また平成22年には仙台二華中学校・高等学校を設置する予定になってございます。あと連携型の中高一貫校でございますけれども、これは志津川高校と志津川、歌津の中学校と連携した中高一貫の教育を今進めているところでございます。

次の柱として、開かれた学校づくりでございます。これにつきましては、保護者や地域住民等の意向を学校運営に反映させる仕組みとして学校評議員制度を導入することを構想に盛り込んでおりましたが、これについてはすべての高校について実施してございます。

次に、学級減並びに学校の再編でございます。これにつきましては、期間中に前期計画と後期計画ということで合わせて全日制の五つの統合の計画が示されてございました。これにつきましては現在四つの統合が既に行われてございまして、8校プラス一つの分校が四つの高校に再編されてございます。22年までに、あと白石高校と白石女子校、塩釜高校、塩釜女子校の統合をすることにしてございます。学級数につきましては、ここに記載されておりますように492学級から現在は405学級になってございますので、87学級減少しているということでございます。

次に、男女の共学化につきましては、計画終了期間であります22年4月までにすべての高校が共学になるという予定でございます。

以上説明してきたように、現在の構想につきましてはまだ進行中でございますけれども、おおむね計画どおりに進捗しているものと考えてございます。

続きまして、4ページをお開き願いたいと思います。4ページの資料は本県高校生の進路状況について示したものでございます。

4ページの左側の下の表をごらんいただきたいと思います。この表は平成19年3月に卒業した生徒の進路先をあらわしたものでございます。一番上の欄になりますけれども、卒業生2万2,941人につきまして、短大を含む大学等への進学者が9,762名、専修学校等に進学した者が6,052名、就職者が5,774名、その他それ以外の者が約250名となっております。下のデータをグラフにあらわしたものが上のグラフになってございます。パーセンテージが入ってございますけれども、おおまかに言えば100人の卒業生のうち42～43名の方が大学等に進学していると。27名の方が専修学校に進学と。25名の方が就職しているというのが宮城県の高卒業者の状況になってございます。学科別に見ますと、専門学科で

ございますけれども、専門学科の下の方に看護とその他というのがあります。その他は理数科系なんですけれども、それ以外の専門学科につきましてはやはり就職の方が多いという状況になってございます。

次に(2)の右側でございますけれども、大学等への現役の進学率並びに進学達成率の推移でございます。19年3月卒業者の大学等への進学率につきましては、先ほどご説明しましたように、この表の右側になりますけれども42.6%になってございます。宮城県の大学進学率につきましては着実に増加しておりますけれども、全国の大学進学率が51.2%になってございますので、まだ進学率については全国よりも低いということになってございまして、約8.6%低い状況にあるということでございます。その下の表が大学等現役進学の達成率となっております。これは大学を希望する者の達成率でございますけれども、これも19年3月卒業者につきましては84.6%の達成率になってございます。これも全国より低い状況にあるということでございます。

次に(3)でございます。就職の決定率並びに就職後1年後の離職率の推移をあらわしたものです。就職決定率につきましては、上にグラフがございしますが、全国と宮城県については就職決定率に随分開きがあったわけでございますけれども、18年3月の卒業者からは全国を上回る決定率になってございます。その下の表は就職した者が1年以内に離職する割合を示したものでございしますが、全国的にも就職者の約4人に1人が1年以内に職を離れるという状況になってございまして、宮城県の離職率も同じような傾向がありまして、全国よりも若干高い傾向にあるという状況でございます。

次に5ページをお開きいただきたいと思います。4のグラフは就職者について産業別と出身学科別に見たものでございます。一番下の出身学科別の構成を見ていただきたいと思います。先ほどの表にあったんですが、普通科の卒業者の進路としては大学等への進学が最も多いわけでございます。就職者は15%にすぎませんが、就職者だけを見た場合の出身学科ということで考えますと、普通科の子供が44.6%になってございまして構成的には一番高くなってございます。これは、普通科の生徒の母数が大きいということがあるものですから、一番大きい44.6%を占めているという状況になってございます。

次に、2段目と3段目の産業別と職業別就職先を見ていただければと思います。就職先の大體4割が製造業あるいは下の方で見ますと生産工程という形で、2次産業系に4割ぐらいということで、残りが大體3次産業となっております。1次産業従事者については1%未満というような状況になっております。

次に、右側の専門学科別の学級数及び定員数の推移でございます。これは19年4月のデータになってございますが、各学科の学級数と募集定員でございます。この一番下の構成比を見ていただきたいんですが、現在の宮城県の公立高校の募集定員は普通科が大体66.9%になってございまして、約3分の2が普通科という構成になってございます。専門学科につきましては、総合学科、平成7年にできました新しい学科なんですけれども、これが大体5.1%。専門高校が約28%の構成になってございます。専門学科別をもう少し詳しく見ると、農業関係が5.1%、工業関係が10.3%、商業が10.1%という専門学科の構成になってございます。

続きまして、6ページをお開きいただきたいと思います。6ページは中学校卒業者の今後の見込みについて示したものでございます。下の2の各地域の中学校卒業者の推移、将来予測を見ていただきたいと思います。これにつきましては5年単位で数字を入れさせていただいておりますが、今回策定する新たな将来構想の期間に最も近い22年3月の中卒者についてですが、一番下の欄になりますが、県全体で2万2,833人という数字になってございます。これに対しまして、新たな将来構想の終期に当たります平成32年3月では2万人を割りまして1万9,767人という数字になってございまして、10年ちょっとの期間になりますけれども約3,000名の中卒者の減になってございます。これを、5年単位でございまして前期・後期で見た場合に、前期として4.7%の減、後期で9.2%の減となりまして、後期の方の減少幅が大きいということになってございます。これを地区別に見た場合ですが、東部地区の本吉地区が減少の幅が一番大きい状況になってございます。数字で言いますと、平成22年の9,744人に対しまして平成32年では6,822人ということで約3割の減少になってございます。次いで栗原地区の減少の割合が高くなっているという状況でございます。

次に、(3)の今後の学級数の見込みと学級規模別学校数という表でございますけれども、「平成19」というところを見ていただくと、ここに学校数と学級数、1校当たりの平均学級数と書いてございます。平成19年現在で、県全体では412学級がございまして、1学年でございまして、1校当たり5.2学級が平均になってございます。これが平成32年については342学級数になってございまして、この試算の出し方につきましては19年の中卒者の減少の割合を19年度の学級数に掛けて出したという形になってございますので、中卒者の減少をそのまま学級の方に反映させた形で出しているということで、40人で割った数字ではございません。それで、19年412学級が平成32年では342学級になるということで、70学級の減という数字になります。また、1校当たりの平均学級数を見ますと、小さ

いところでありますと1校当たり平均すると2.6学級とか2.7学級、小規模な学校になってしまうという試算が出てございます。

次に7ページをお開きください。ここの(2)でございます。これは宮城県のデータではなくて、下の方に書いてございますが、財団法人日本青少年研究所というところが調べたものでございますけれども、高校生の意欲に関する調査ということで日本とアメリカと中国と韓国を比較して出しているものでございます。として「自分の将来の目標をはっきり決めていますか」という問いに対して、アメリカが圧倒的にアジア系よりも高く、43.7%の人が「もう決めていますよ」と答えています。次の問いでございます。「高い学歴を得たいか」という問いに対しまして「ぜひそうしたいと思う」のが、一番高いのが中国でございますけれども、日本はかなり低いと。半分くらいになっているという数字が出てございます。また、次の(2)でございますけれども、「偉くなることをどう思うか」という問いにつきまして、日本では「責任が重くなる」「自分の時間がなくなる」というどちらかというマイナ斯的な回答をしているのが多いんですが、ほかの国については「自分の能力が発揮できる」とかなり前向きな回答をしているところがありまして、この資料を見ると、子供の意欲を育てていかなければいけないかというのもこの数字から出てございます。

次の8ページは学習時間並びに学校と地域の協働事例を示してございます。あと済みませんが、9ページは各地区別の高校の設置状況、10ページは地図、11ページに各個別の学級数・募集定員を示してございますけれども、時間の関係もあるので後ほどごらんいただければと思います。

最後に、一番最初のページに戻っていただきたいと思います。これにつきましては高校教育をめぐる現状という形で整理していただいた資料でございますけれども、外部環境と内部環境という二つの要素、二つの側面から一つの資料にまとめたものでございます。

まず外部環境の変化でございますけれども、先ほど来説明してきました少子化の問題がございます。少子化の問題によりまして中学卒業者が減少がこれからの高校の在り方を考えるに当たって大きな制約になっているというのがございます。次に、産業構造の変化というのがございます。全体として3次産業のウエートが高まってございますけれども、本県におきましては、製造業の国内復帰ということもありまして製造業の立地が決まってきているということがございまして、これから学科の構成を考えるに当たって考慮していくことが必要ではないかということがございます。また、大学側の変化としまして、大学進学志望者の全入時代の到来と書いてございますけれども、学力の低下を大学側は問題としてとらえておりまして、大学側のこれ

から入試のあり方についても注意して置く必要があるということで、外部の問題という形で示してございます。

次に内部環境の変化でございますが、中卒者に伴う高校の規模の問題がございます。高校の生徒の多様化に対応していくためにはやはりどの規模が必要かというのがあります。あともう一つは、その下でございますけれども、大学進学、学力の問題があります。あとは真ん中が就職の問題でございますけれども、就職を考えるに当たって産業構造を踏まえた学科の構成、あと就職者と学科の構成のマッチングということで関係がどうなっているか意識していく必要があるだろうということでございます。あと右側の下として、先ほど言いました意欲の問題として、高校生が3年間、学習、スポーツ、文化で意欲を持っていてもらうための意欲の向上問題をどう考えるかというのをこれから考えるに当たって考慮していかなければいけないかという形で示したものでございます。

このように外部環境と内部環境の変化を踏まえながら今後の県立高校の在り方について検討を進めていくと考えてございますので、よろしく願いをいたしたいと思えます。

私の方から宮城県の高校の現状について説明は以上でございますので、よろしく願います。

荒井会長 大変興味深い、多方面にわたるデータをコンパクトにまとめていただきまして、もう少し時間があると余計によかったと思えますけれども、大方の理解が得られるような形で説明をいただいたと思えます。

ただいま説明のありました県立高校の現状を踏まえて、新たな県立高校将来構想策定に向けて、この審議会の目的でございますけれども、本日は第1回目の審議会ということでございますので委員の方々からお一人ずつご意見を頂戴したいと思います。初めに3時10分ぐらいまでに皆さんのご意見を頂戴して、その後若干の質疑あるいは補足をお願いしたいと思っておりますので、大変恐縮ですけれども、お一人3分程度でご意見をちょうだいしたいということでございます。

まず菅野副会長からと予定しておりましたけれども、きょう所用で高橋委員が中座されるということですので、まず高橋委員の方からご意見をちょうだいいたしまして、その後、菅野委員から順番にという形で進めさせていただきたいと思えます。高橋委員、よろしく願います。

高橋委員 ご配慮いただきまして大変ありがとうございます。多賀城中学校の校長の高橋でございます。県の中学校長会を代表してこの場におります。よろしく願います。

今いろいろご説明をいただきました。県立学校の再編について新聞紙上等を見ますと、多方面からのいろいろな批判のもとに血の出るような思いで学校改革をなさったことに、まず敬意を表したいと思います。ただ、昨年まで私大河原教育事務所の方にお世話になっておりまして、小規模校をずっと見てまいりました。そういうような観点からお話をさせていただきます。

非常に交通の便もよくなり、地域格差も大分少なくなったというふうには言われているわけではございますが、子供たちが置かれているところ、つまり地域と切り離して子供たちというのはやはりないんだろうなという実感を持っております。事前に資料をちょうだいしてずっと読んでみたんですが、昭和23年と同じぐらいの人数に平成32年になっていくという状況の中で学校が余ってくる状況にあるというのは、非常に資料として読み取ることができました。

と同時に懸念を持ったわけではございますが、それは、生徒数とか学校数、つまり数、それからあとこういう時代でありますので財政的な逼迫状態の中で、そういった数や財政の論理で公平さを求めていくと、どうしても小規模と言われる学校が統合されざるを得ないんだろうと思うわけではございますが、やはり後期の再編についてのところにも書いてございましたけれども、再編に当たって、地理的条件や学校の歴史・伝統、そういったものを勘案していく必要があると。あわせて、地域住民、生徒のニーズというものを尊重しながら、そういった観点も含めた中でさらに新しい県立高校の構想をまとめていかなければ怖いなという印象を持ったところではございます。一例挙げますと、石巻管内の普通高校においては、非常に生徒数が少ない学校であります。今、地域の方々と結びついて非常に元気のある学校づくりをしていると聞き及んでおります。例えばこういうように学校自体の活性化、それから魅力ある学校づくりを推し進める中で、小規模であっても非常に教育効果のある学校づくりができるのではないかと思いますので、今後の審議会を通してそういった方向も模索しながら進めていければと考えているところでございます。ありがとうございました。

荒井会長 それでは、菅野副会長から順に時計回りでご意見をちょうだいしたいと思います。菅野副会長、お願いします。

菅野副会長 宮城教育大学の菅野でございます。よろしくお願いいいたします。このたび各委員一人一人ということですので、副会長という役割ではなくて、一委員、そして大学関係者という立場でございますので、私の方からはその辺を中心に述べさせていただきます。

先ほどご説明をいただいた資料でいきますと4ページあたりに関連することになると思いますが、大学関係者としてはどうしても関心を寄せざるを得ないこととしては、一つはやはり大学進学率がでございます。大学に進学することだけが絶対的によいことではないにしても、やは

り本県40位という全国の順位を見るだに、ちょっとこれは何とかしなければいけないのではないか。しかも、宮城県立大学などもできまして、東北大学はもちろんのこと、宮教大、あとの多くの優秀な私立大学を抱えている仙台がある宮城県としてはかなり低いのではないか。政令指定都市として考えてもかなりの低さなのではないか。この辺をどうするか。これはやはり基本的には、基礎的な学力といいますが、学ぶことへの意欲や姿勢と関連しているのではないかと思います。先ほど白幡委員でしょうか、各セグメントというか領域がどういうことができるかということを考えながらこの会も、というご発言があって、私もおっしゃるとおりだと思っております。つまり、家庭とか地域、特に家庭、親御さんが自分たちの子供にきちんとした学力をつけさせるんだという意識をなるべく持っていただくような形で、そういう下支えがあって高校の学力向上というか、勉強する場なんだというような、その当たり前のことがやはりもう少し浸透していくべきなのではないかと思っております。

その点については一つだけ情報というか、昨年秋からマスコミ等でも話題になっておりましたけれども、国立大学協会の方で、センター試験で高卒程度の学力を見るというのは限界があると。つまり、入試である限りは例えば教科書に載った問題は出せないわけですから、教科書あたりをきちんと勉強しているということを確認できるのはセンター試験では無理なんですね。ですから、そういうところで高校卒業の学力をきちんと担保できるようなシステム、つまりいわゆる高校卒業試験というか認定試験のようなものだと思うんですが、そういう声も既に出ているわけです。そうすると、先ほどの大学進学との絡みで言うと、やはり宮城県の場合、もう少し基礎学力や高校での学ぶ意欲、これは小中高と一貫した問題だと思っておりますが、その辺について、我々審議会も含め、あるいはいろいろな各分野等々含めて、きちんと形を示すということが必要な時代になってきているのではないかと考えております。以上でございます。

荒井会長 ありがとうございます。それでは、佐藤委員お願いいたします。

佐藤委員 大和町の大和町立大和中学校のPTA会員をしております佐藤と申します。宮城県PTA会の副会長もさせていただいております。私の子供は今大学生、高校生、それと受験生、中学3年生を持っておりまして、まさに今日ここにいるのは、自分の子にも置きかえて考えてみたり、とても複雑な思いでこの席に座らせていただいております。

今いろいろと学校関係の再編とかということで進んでおりますけれども、例えばの話で申し上げますと、今大和町ではやはり東京エレクトロンさんやセントラル自動車さんが来て就職の地元採用という、地元というか大きい範囲での地元になりますけれども、採用の話とか、そういったところにやはり多くの親が関心を持っているところです。先日もそういった企業さんの

立地ということで勉強会がありまして、そうしたところ、例えばセントラル自動車さんであると、大学を卒業した人を地元で求めているわけではない、高校卒業で十分だという話を聞いたりしますと、親としてはとても微妙なところにあります。まさに自分の息子が今受験となりますと、やはりまだ田舎なものですから長男は家を継ぐとかそういった感覚でいる親御さんが多いと思うんですけれども、そんな中で、学力をつけさせたい、進学もさせたい、だけれども実際のところ進学させると地元に戻る確率がとても少ないと。本当に現実のところ親としても微妙な位置で、企業が立地する、それから採用関係についてどんな考えを持っていただらいいのかというのを今、現実、結果が出ないような状態で悩んでいるところです。

そんな中で、例えば先ほど学校の再編関係の中で学科の再編の中で、例えば地元の高校の倍率は1倍を切っている、0.幾らというところであったときに、学科の編成はどうなっていくんだろうか。ロボットコンクールなどではすごく全国的にも優秀な成績をとっているんですが、地元の親にしてみると、申しわけないんですけれども入らせたい高校になっていないんですね。ですから、先ほどの指針の中の魅力ある高校づくりとなったときに、学校の経営のところと親御さんが魅力と思って入れたいところというのをどうやってつくっていくんだろうかというのに物すごく関心を持って、この会で、親御さんにとって、子供にとって魅力ある、入りたい、学ばせたい学校をどうやってつくられていくんだろうかというのを物すごく親の立場として今考えながら座っております。

やはり兼業農家が宮城県の場合は物すごく多いです。特に仙台近郊はほとんどそういう状態でおりますので、農業経営は成り立ちません。がしかし、やはり跡継ぎとしてはまるっきり自由にさせるわけにもいかないというところがありますけれども、そういう中で、こういった教育環境をつくりつつ、地元においても高いレベルを学びながらいい人生が送れるというのを子供が夢見られるような、そういった教育が必要になってくるのかなと。余りにも抽象的な言葉で申しわけないんですけれども、やはり東京とか意識がそういった中央に向くのではなくて、地元でもきっちりと生活ができて、そして地域を愛したり地域を守っていく子供たちをどのようにこの15歳から18歳の間でつくっていったらいいか、子供がそこで人生設計を考えられるのか、そういったところに高校教育の持つ意味もあるのではないかと今思っているところです。

まだまだ、こういったこと、ああいったことと提案はできませんけれども、親の立場としてとても複雑な思いと今この委員会がなさっていることに対して期待を込めてここに参加したいと思っております。よろしく願いいたします。

荒井会長 ありがとうございます。それでは、猪股委員お願いいたします。

猪股委員 猪股と申します。宮城県宮城第一高等学校のPTA会長をやらせていただいております。宮城県の方針で充て職で宮城県高等学校のPTAの連合会の会長もしています。私、こういうPTA活動というのは余り得意ではない方でしたが、立場上、一生懸命今年はやりたいということで、今審議会にも出させていただいて、この間送っていただいた資料を見てああこういうことなんだなと。非常にコンパクトにまとまって非常にすばらしい資料でございました。

将来的にあと10年ということですが、10年前と比べると2万人以上生徒が減るであろうということで、やはり将来、多分二極化になっていくのではないかと思います。どちらかというと、私たちの高校のときもそうでしたけれども、優秀な生徒が県の北部、南の方からみんな市内に集まってきて、仙台一高とか二高、一女、二女という形で入る状況がかなり昔はあったんですけれども、そういうのに近づいてくるのかなと。それとやはり少子化でどうしても生徒数が減ると学校のパワーがかなり低下するということで、学校格差が今後かなり開くのではないかと。私なりに考えると、この資料を見せていただくと、多分これでは経営的に成り立たない高校が何校か出てくると思うんですけれども、そういうことも含めて私も勉強させていただきながら、この委員会のメンバーとして意見を言わせていただきたいと思います。やはりどうしてもこういう難しいデリケートな問題をですね、経営的に言えば、少ないところはもう廃止して全部統合しちゃえというのはだれが見てもそうだと思いますけれども、教育というのはそうではないのではないかと思っておりますので、その辺を勉強させていただきながらやらせていただければと。私も初めての経験でございますので、勉強しながら私なりの結論を導き出していきたいと思っております。ひとつ、1年間でしたか2年間でしたか、期間中よろしく願いいたします。ありがとうございました。

荒井会長 ありがとうございます。それでは、阿部委員お願いいたします。

阿部委員 ホテル観洋の阿部と申します。私どもでは、毎年高卒の方たちをお迎えしている、また毎年高校生の職場体験で生徒さんを迎えているということで、現場の声ということを上げられたらと思って参りました。

正直申しまして、なかなか難しい年齢だなというのが正直な思いでございます。大人でもない、子供でもないということで、非常に接するのも年々難しさを感じているのが実情でございます。すべての学生の方とは思いませんけれども、情報が氾濫して、都会の問題が地方においてもというようなことを感じることもございます。先ほど資料を拝見いたしましても、1年未満で離職率が全国平均よりも高いなどというのは、昔から東北人は忍耐強いとか真面目だとい

う印象を割合持たれがちだったと思うのですけれども、そういう中で宮城県が全国平均より定着率が下回っているというのはとても残念で、私たち中小企業の人たちの集まりでも非常に高卒の人たちの離職率の高いのが問題として上がりがちでございます。ですから、職場においてもどのようにしたら定着率が高まるかということがとても重要な問題になっております。それも学校だけの問題ではなくてやはり家庭との関係も非常に影響があると思っております、以前であればそういう話が出たときにも、親御さんの方で説得をしたり、「石の上にも三年」ということわざがあるように、その様に本人に言い聞かせていた傾向が、最近では安易に本人の希望を認めたり、本人に言わせると「親が理解してくれた」というような話しが多くて、職場だけで本人に思いとどませようというのはなかなか簡単ではない現状でございます。

社会性に乏しい人たちが一部見えがちであるということ、インターネットや携帯電話でのやりとりはできるのですが、対面的なコミュニケーションの能力は高まっているとは思えないようなことがございまして、割合と手厚い環境の中で手取り足取り育てられたということがよい結果ばかりも生んでいないような気がしております。

あとは参考までに、一部私どもの方にも若い外国人の方などが研修で来まして、ある高校で公開授業がございまして、学生ということもありまして見学させた際、「日本の高校はどうですか」と尋ねましたら、先生と生徒がお友達の関係のように見受けられると。うらやましいと思う人もいましたし、「あれで勉強になるんですか」というような感想も聞かれました。私なども、自分の高校時代に受けていた授業と現在では変わっている面もあるのではないかとというのが割と持っている感想でございます。もちろん、多くの高校を拝見したわけではありませんので、偏った意見になってしまうかもしれませんが、このようなことを感じたりしながら若い方たちと接しているような状況でございますので、この会を通じながらいろいろ勉強させていただきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

荒井会長 ありがとうございます。続きまして、木村委員お願いいたします。

木村委員 こんにちは。石巻市から参りましたゼン・インターナショナルの木村と申します。よろしくお願いいたします。私自身も高校2年生の娘を持つ母でございまして、現在高校のPTAの方もやらせていただいております。

今話題というか、ちょうど新聞等でも報道がありました石巻好文館高校に娘が通っておりまして、男子の生徒も3学年ともに増えまして、男子の部活がようやく今年度から少し活発になり、野球の方も今回初出場という形になっています。子供たちの様子を見ていますと、男子校が女子との共学になった場合と女子校が男子との共学になった場合ではかなり違いがありまし

て、女子校に入ってくる男子の方は少しおとなしい印象を受けます。授業の合間とか部活動の時間も、昨年度までを見ていますと、放課後どうしてもなかなか仲間の方に入れずに廊下の方で時間をつぶしたり、女子のパワーが余りにも大きくてそういったような面も見えましたが、これから徐々に変わっていくのかなと期待もしているところです。

私も商売をしている関係で、高校生のやはり職場体験やそれからアルバイトの受け入れを多く飲食店の方でさせていただいていますが、やはり先ほど阿部委員もおっしゃっていたように、今の高校生の子供たち、いわゆるコミュニケーション能力という部分では非常に難しい子もいるなど感じている次第です。どうしても携帯電話をすぐに持ってみたり、仕事をしている間でも携帯電話が気になってしまったり、また新卒の子供たちでもそういう状況が見られまして、学校でも今は携帯電話を自由に持っていけるようではありますが、そういったような機器に頼っている子供たちがどうしても友達同士の会話がスムーズにできていないのかなと気になっていきます。

また、家庭環境、石巻あたりも非常に状況はさまざまで、母子家庭、父子家庭も大分増加しております。そういった中で地方の経済環境も本当に今厳しいものですから、やはりこれから外部環境が、きょう外部環境のところが出ておりましたけれども、多分仙台よりももう少し回りの地方では、これ以上に厳しい環境の中での子供たちの就職の受け入れや今後の進路の選択になっていくのかと思います。そういうことで、これから私も地方の一員として自分の子供のことも通しながら意見をさせていただければと思っています。

1点だけ、先日、定時制高校が統合した東松島高等学校の学校評議員を引き受けさせていただいて、学校の見学とお話を伺う機会がございました。その中で感じましたのは、子供たちが自分で将来の進路に必要な履修科目をきちっと選んで、自分の学びたいことを好きなだけ学ぶという姿が見られて、この単位制・多部制の高校というのを初めて私も見学したんですけれども、新しい試みとしては非常にこれからの時代にマッチしているのではないかと思いました。昨年度初めての高校卒業生が出ておりますが、中には国公立に進学した子供たち、山形大学や宮城大学など公立の学校を目指して進学ができた子供たちもいましたし、数 を選択して真剣に先生に質問している子供たちの姿も見られました。従来の定時制であった矢本高校がこういう姿に変わるのかということで新たな驚きを感じています。そういう部分でも、特に国公立に入学した子は中学時代は不登校でほとんど学校に行けなかった子供さんだと伺っております。そういう中で、新しい高等学校、新しい単位制の高校で自分なりの勉強の仕方を身につけて、将来にしっかり足をつけて進んでいく子もいるということは、こういった試みも今後、まだ県

内ではそう多くはないようなんですけれども、これから学校再編の中で新しいいい機会、子供たちにとってはいい学校づくりになるかと感じましたので、一言申し添えさせていただきます。県内かなり遠い地域から通っているようで、東松島には名取とかそれから県北の方からも2時間半から3時間かけて今現在毎日通学している子供さんもいらっしゃるということでございました。以上でございます。今後ともよろしく申し上げます。

荒井会長 ありがとうございます。それでは、公平委員お願いいたします。

公平委員 大崎市鹿島台で、お米、それから木いちごのラズベリー、ブラックベリーの生産を、農業を専業でやっております公平と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

自身こういった審議委員という声がけをいただいたというのは、実際に実業高校農業科出身で、現状農業を専業でやっているということでお声がけをいただいたのかと思うんですが、自分の30年前の高校の選択を考えたときに、しっかりと自分自身農業をやりたいから農業科に行くんだという意識を持って農業高校に進学したのを覚えております。ただ、今回の資料なども見たとおり、子供さんたちが非常にマイナス思考になっているか、将来何をしたらいいのかわからないというような形で、それなりの普通科にさえ進んでおいてそれから考えようというような、もう職業選択で高校を選ぶような時代ではなくなっているというのが資料でも見受けられるような気がします。

現状で私今地元でスポーツ少年団の指導をしているんですが、小中学生一貫の少年団なんですけれども、やはり中学2・3年ぐらいになってくると自分のやっているスポーツで高校を選択したいという生徒の相談も受けたりして、今、私学の方で一生懸命されているスポーツに特化したような特色ある学校づくりというのがあるんですが、全県1学区になることを考えた場合に、子供たちの多様な個性や特性を伸ばすためにはスポーツ部分も少し頭に入れていただいて、小規模高校でも非常に魅力ある学校づくりをしているところが、ちょうど大崎学区の1学年が二クラスになっている高校が隣に二つあるんですが、どちらの高校も、野球、それから銃剣道ですか、そういったスポーツで生徒さんを集めるという努力もしていて、大人目線でこういった現状を考えると学校の再編というのはどうしても出てくるとは思うんですが、自分が子供たちにかかわっている関係から思うと、一生に一度しかない10代なので、そういったスポーツ部分での、もしくは職業選択での、そういった特色ある、たとえ小規模校になったとしても、そういった子供たちを呼べるような魅力ある学校づくりもできたらいいのではないかと思います。ただ、まだまだ私の言っている部分に関しては理想論ですので、いろいろ委員の皆さんのお話を聞きながらこれから自分ができる提言を進めてまいりたいと思いますので、どうぞ

よろしく願いいたします。

荒井会長 それでは、続きまして佐々木委員からお願いいたします。

佐々木委員 初めまして。栗原市高清水から参りましたグラフィックデザイン業をやっております佐々木でございます。よろしく願いいたします。きょうは一地域人としての参加ということなんですけれども、一昨年まで宮城県PTA連合会の副会長をさせていただきまして、また、自身も高校2年生の子供がおりますので保護者としての立場からお話ができたらと思っております。申し上げたいことがまとまらないままのお話になりますけれども、幾つかお話ししたいと思います。

まず、娘が通っているのは築館高校なんですけれども、築館高校は17年度からだったと思うんですが男女共学になりまして、男子生徒・女子生徒半々ぐらいの比率だと思います。それで、今は校長先生が3年目でいらっしゃるんですけれども、昨年から「栗原の元気を築高から」ということでキャッチフレーズみたいなものを掲げて、生徒の指導、また保護者にいろいろな情報を流していただいています。地域の中の学校ということにとらえていただいているのそういうキャッチフレーズというか言葉だと思うんですけれども、保護者にとって、また栗原市に住む者として、学校というのは教育の場ではあるんだけどやはり地域の中の学校というとらえ方をされていただいているということで、心強い気持ちであります。

先ほど来いろいろなお話があったんですけれども、実際、生徒は行きたい高校を選択するというのではなくて現状通える高校ということで、例えば交通手段とか、栗原は鉄道が通っていませんのでバス頼みなんですけれども、それさえも数年前に比べて本数がかなり少なくなっており、保護者が送迎するということになっております。少子化等の影響で学校の統廃合とかそういうことは本当に避けては通れないことではあると思うんですけれども、そのあたりの交通手段ことなども考えながら、地域の人と一緒に学校づくりを考えていければいいのではないかと常々思っています。

学校評議員制度というのがあるんですけれども、私自身、地元の高清水小学校の評議員ではあるんですが、学校側からいろいろなお話をいただき、こちらがそれに対しての意見なり感想を述べ、要望も述べるということで、それが現実どのように実を結んでいくかというのを考えると疑問に思う部分もあるんですけれども、もう一步踏み込んだ形で、地域の人たちが支えるというか、一緒になって盛り上げていく地域の学校というのもこれからますます考えていかなければならないのではないかと思っています。

先ほど公平さんの方からもお話あったんですけれども、子供たちが本当にマイナス思考とい

うか、そういうふうにならざるを得ない社会環境とかはあると思うんですけども、先ほどの資料にもありました高校生の意欲に関する調査では、ほかの国に比べて本当に夢が持てないというか、現実的な考えでいるということを改めてこの数字によって思い知らされました。やはりこの背景には、大人がそういう社会を示していないということが一番大きいのかと思っています。より現実的にならなければいけない世の中というのはやはり悲しいなと、私たちの責任なのかなと思います。それは裏を返せば、夢を持てるような教育というかそういうことを目指していけば、まずそこに一つ大きい目標を持っていけばいいのかなと。漠然としているんですけども、まずそこに子供たちが夢を持てるような教育、それを具現化していくことが大切かと思っています。

いろいろなことを申し上げたんですけども、私は県北ということではいるんですが、それぞれの高校が抱える問題は本当にさまざまだと思うので、それをどのようにしていくかというのはやはり地域の人々の声を聞くことが大切かと思っていますので、そのあたり、なるべく県北のいろいろな状況をお話しできればと思っています。よろしく願いいたします。

荒井会長 ありがとうございます。まだ、半数の方が残っていらっしゃいます。残り時間を考えますと、委員お一人3分間という持ち時間もかなり厳しい状況がございます。恐縮ですが、何とぞ、事件厳守をお願いいたします。それでは、続きまして白幡委員からご意見をお願いしたいと思います。

白幡（洋）委員 リスト上はそういう肩書になっていますけれども、民間企業のメーカーに46年勤務しておりまして、そのうち36年間はこの宮城県で仕事をしておりましたので、一応宮城県の事情を知っているかというふうに思っております。この4月からみやぎ産業振興機構にお世話になっていますが、こちらの方は県内の中小企業のご支援ということで、アグリも含めてなんですが、そういうところの現場もわかりますのでそういう情報を審議会に入れていきたいと思っています。それとここ二、三年は、みやぎ工業会、たかだか400社ぐらいの団体ですけども、ここの副会長ということで、特に政策委員会で工業会の企画立案に携わってきました。副会長はこの6月で退任しましたけれども、今後も政策委員会に携わっていきますので、そういうところからもいろいろ人材育成の話は出てきますので、そういう情報をこの審議会に持ってきたいと思っています。ご承知のように工業会ではクラフトマン21という事業を受託してしまして工業高校の支援もやっておりまして、これは2年目に入っております。こんなことの情報もいろいろ皆さんにお伝えできるかと思っています。私自身も在職中に8年間ほど非常勤で、高校ではないんですけども高専の先生をやらせてもらいまして、二十歳の人間だ

ったんですけれども、学生のすばらしさとだらしなさ両方感じておりますので、そんなときも思い出して話をしたいと思います。

3分という話なので、全部話していると明日の朝になってしまいますので、資料をつくってありますので後ほど事務局にお渡ししておきますので、骨のところだけ3分間ぐらいでお話しさせていただきます。

今ほど平成13年3月からスタートした将来計画の話がございまして、それらがこういう課題があるという教育庁側からご説明ありましたけれども、もうそろそろ22年で終わるわけです。当初ねらった目標とした状況が今どうなっているのかということは、恐らく先ほどの説明の1ページの真ん中に書いてあった今後のあり方だけではないのではないかと気がしています。ですから、もう8年間やってきているんなデータが集まってきて、そのデータの分析をもう少しやるべきではないか。データは一つの事実ですから尊重しなければいけないんですけれども、そのデータからどういう認識をするのかということがもっと重要だと思うんです。ですから、データの裏に潜む真実というのをもう少しみんな認識しないと、誤った処方せんを書いてしまうのではないかと。先ほど定着率や普通科が進学率がよくないというのは、平均的に見るとそういうことになるんですけれども、分析するといろんなことが見えてくるのではないかと、そういうことをやりたいというのがあります。

それから二つ目です。何度も出てきますけれども、98%という中学校から高校の進学率はもう義務教育と同じですよ。あるいは50%を超える大学進学ということになると、もう高校だけで高校の将来計画を練るのはノンセンスだと思うんです。やはり中学校、大学、高専も含めてですけれども、そういうところとどう連携して、その中で的高等教育というのがどういう役割を担っていくのかということをやっていかなければいけないという気がしています。

それと、人が減っていくんですけれども、私はこれは富県戦略の中でもよく言っているんですけれども、企業誘致と同じように住民誘致をもっとやるべきではないか。人が足りない、足りないじゃなくて、人を増やせばいいではないか。ということになりますと、やはり「定着したい宮城県」にしていくべきではないか。セントラルが来ます。エレクトロンが来ます。しかし、当初は来るかもしれないけれども、3年たって5年たって帰ってしまうのではなくて、彼らが定着して、そういう人たちがまた中学生、高校生を地元の学校に通わせるという視点も重要なのではないかとということで、ただ単に県内のシミュレーションをやって、確かにこれから10年先15年先というのは変えようがないんですけれども、住民を誘致するという視点と、それからもう一つ重要なことは、やはり子育て支援と連携して考えていかなければいけないの

ではないか。ですから、減ることだけを考えるのではなくて増やすことも、これは教育庁だけの問題ではないですけれども、県として考えていく必要があるかという気がしています。

同じことは、富県戦略では10兆円と掲げています。1.5兆円増やしましょうということをやっていますけれども、ここの中で特に製造業の集積を高めましょうと。全体的には恐らく第3次産業へのシフトが高まるかと思うんですけれども、宮城県は製造業の集積を高めましょうということを言っています。これも富県戦略の会議でよく言っているんですけれども、10兆円にするための必要な人材の確保はどうなっているのか。その確保の中でどんな人が必要とされるのかということ踏まえた上で教育というのは、すべて産業界に対応して教育をやる必要はないですけれども、必要な人材の確保という側面ももう少しブレークダウンしていくべきではないかという気がします。

その反面、先ほど委員の方からありましたけれども、宮城県の資産というのはやはり農業であり水産業であり林業だと思えます。その担い手がどんどん不足しているというところはどうまた目を配っていくのかということで、やはり農業も林業も水産業も宮城県の宝ものだと思うんです。その宝ものに対する人材の配置をどう考えていくのかということも重要ではないかと思っています。

いずれにしてもこの将来計画の主役は学生ですから、学生におもねることも迎合することもないですけれども、その学生に学ぶ力を高校3年間で持ってもらうために、どう社会が、企業が、家庭が、学校が役割分担できるのかということここを議論できればいいかなと。そういう意味で言うと、今いろんな層の人が参加していますので恐らく意見がぶつかるのを楽しみにしております。以上でございます。

荒井会長 ありがとうございます。それでは、西山委員お願いいたします。

西山委員 東北経済連合会の西山と申します。産学連携や中小企業等の経営支援を担当しております。また、県知事、市長、東北大学総長、東経連会長による産学官連携のラウンドテーブルの事務局も担当しております。ラウンドテーブルでは、産業競争力強化に向けた人材育成を重要課題の一つとして取り上げています。教育の専門家ではありませんが、本日いただいた資料に関連して幾つかコメントしたいと思います。

まず一つ目です。本県における高校改革の現状の2ページを拝見させていただきますと、現在、公立高校の数が79とか75ということですが、将来的には生徒数が6万人を割るとのデータを拝見しました。これは昭和33年ぐらいの規模ですので、昭和33年の時点の高校の数は56校ですから、今後、20ぐらいの高校が減ってもおかしくないということだと思います。

ただ、今までの議論をお聞きしていると、単に数合わせの議論はよくないと。小規模でのよさがあるということもありますし、あるいは、せっかく今までハードができていますのでそのハードをうまく生かすという論点もあるでしょう。また、これまで築き上げてきた高校と地域とのコミュニティというか連携というものもあるので、それを生かしながらという議論が大切だとは思いますが。しかしながら、非常に財政が厳しいのでなかなかそう悠長には言っていられない。当たり前のお話ですけれども、しっかりした骨太の方針を設定して何が優先順位かを定める必要であり、本構想の重要性を痛感しています。

次に骨太の方針を考える上での感じたことを述べさせていただきます。東京エレクトロンやセントラル自動車の誘致への対応は大きなテーマだと思います。特に東京エレクトロンは研究開発部門なのでかなり高学歴の人たちが来ることが期待されます。そのお子さん方を東京の私立の進学校に残すのではなくて、一緒に宮城県に来てもらって学んでもらうというようなことが起きればよいと思います。このため、宮城県立高校の非常にいいビジョンや訴求力のあるわかりやすいコンセプトを打ち出すことが非常に重要になってくるのではないかと思います。

アメリカは大体私立大学が有名ですが、カリフォルニアだけは州立大学のユニバーシティー・オブ・カリフォルニア（UC）がイーストコーストに比べると非常に自由な校風があって有名です。UCというとUCバークレーからUC L Aからたくさんありますけれども、UCバークレーは電子機器やMEMSが強くて、UC L Aだとフィルムが強いということですが、それでもそれぞれ特徴あっても全体としてもコンセプトがあるのではないかと思います。ぜひ宮城県立高校のわかりやすいコンセプトというのができればと思います。

関連してコンセプトは何かということですが、二つあげたいと思います。一つは学力です。学力をやはり向上させることは重要です。二つ目は、先ほど携帯ばかりしてという話もありましたが、社会性が非常に重要です。高校生は義務教育じゃないからという議論もありますが、塾とは違って高校教育の特徴というものはやはり学力プラス社会性をきちっと身が重要なポイントになるのではないかと感じました。

たくさん思いついたことはありますが、最後に気になった議論をもう1点だけさせていただきます。少子化で学生の数が減るわけですが、一方では教員の高齢化もでてくると思います。当然、民間企業のようなリストラは難しいわけですが、どのように学生の数とともに教員数をハンドリングするかが重要になってくると思います。教員が高齢化していくと、学園ドラマなどで出てくる若くて非常に理想に燃えているような教師が減っていく可能性があるということが気になっています。本日は以上3点にさせていただきます。

荒井会長 ありがとうございます。あと8人の委員の方からご意見をいただくことになりま  
すけれども、このままで行きますと、予定の終了時刻を過ぎてしまう心配がございます。これ  
からお話いただく委員の方々にはたいへん申しわけありませんが、お一人3分弱でお願いいた  
します。次回以降の会議におきましても、ご発言いただく機会は十分にございますので、いま  
申し上げた時間配分でお願いいたします。では、本図委員お願いいたします。

本図委員 宮城教育大学の本図と申します。よろしく申し上げます。大学でも会議が多くて、  
1時間過ぎるともういやという感じになってまいりますので、皆さんも大分お疲れかと思  
います。手短に申し上げたいと思います。

こういった事業に関しては、私自身としては大きく言って二つのことが大事かと考えており  
ます。一つは、青臭いことを申し上げますけれども、やはり時々立ちどまって機会均等とい  
うことは何なのかということ議論していく必要があるかな、確認していく必要があるかなとい  
うことです。高校全員入学を80年代少し前に達成されて、義務教育じゃないんですけれども  
社会の中で機会均等ということが認知されてきているかということをお考えになると、そう  
いった理念というのは一応大事にしていかなければならないのではないかとということです。

二つ目は魅力的な学校をどうつくっていくかということで、簡単に申し上げますと、まずで  
きるようなところでは、キャリア教育を充実させてどの専攻の子にも有能感を持ってもらうと  
いうことを、学校側、教員側が意識していく必要があるだろうと。これは手短にやっていける  
ことで、ハード面の整備とあわせてやっていかなければいけないのではないかとということです。  
第2点目は、学校をつくっていくことに関して、委員の皆さんからも出ていましたけれども教  
師の力量アップをどう考えていくかということでして、子供にとっては大学教員なんていうの  
はあてになりませんので、最後の大人というか、家族以外の最後の社会的な大人で、学生たち  
に感想を聞いても高校の先生の印象というのは非常に残っているわけです。ということも踏ま  
えまして教師の力量アップをどうしていくか。ちょっと審議会の所掌を超えますけれども、名  
物校長がくれるような、校長のリーダーシップで学校をつくっていけるような人材の配置や  
人事ということ意識していかなければいけないのではないかと考えています。

3点目は、では学校そのもので、例えば先ほども農業、林業、水産業を大事にというご意見  
もありましたけれども、農業とマーケティングが一体となったようなものや、あとは例えば京  
都の堀川高校の探求科のような、教育委員会の皆さんご存じでしょうか、必要でしたらビデオ  
をお貸ししますので、荒瀬校長がリーダーシップをもってやっていると。決してそれはよく見  
ると進学率云々ではないわけです。そういったことや、こんなふうに魅力的な高校を宮城県は

全国に先駆けてつくっているよというアピールを、ハードの議論とあわせてソフトの面もにらみ合わせながら議論していく必要があるのではないかと考えております。以上です。よろしくお願いいたします。

荒井会長 ありがとうございます。それでは、北島委員お願いいたします。

北島委員 仙台一高の北島と申します。手短にお話し申し上げます。

高校長協会の方から選ばれて出てきていると思っておりますので、県内の各県立高校がそれぞれの学校の魅力をどうやってつくるか、ブラッシュアップするかということで頑張っていると思っております。これまでの資料やお話にもありますように、やはり本県の高校教育は多様性の中にあると思っておりますので、多様な教育の中で生徒たちのいわゆる生きる力、自己実現、進路の実現が達成されている、そういう多様性を認めていけるようなここでの基本方針づくりをしていただければありがたいと思っております。次回以降、またいろいろと発言させていただきます。以上です。

荒井会長 ご協力いただきましてありがとうございます。それでは、早坂委員お願いいたします。

早坂委員 宮城県農業高校の早坂と申します。県農業高校は2年目でございます。

私が農業の教員になったころは、県内に農業高校といえますか農業関係高校が13校あったわけでありまして、しかも生徒数が5,000人くらいいまして、今だと2,100人くらいということでもろに影響していると。その一つの中には、当時、農業高校の果たす役割としてはやはり農業の担い手を輩出するということが強調されたわけですがけれども、いかんせん、今農業がある意味では、こういう表現が適切かどうかわかりませんが、元気がないといえますか、農業だけでは食べていけないと。そしてまた、農業の中でも大規模な農業経営ということを中心に進めていることもありまして、なかなか農業高校を卒業して専業農家に進むというわけにはいかないのが現状であると。そういう一面を持っております。ただ、この計画が10年を見越してというのであれば、21世紀がある意味で食と環境の時代ということであれば、私は農業高校からそういう担い手を輩出するのは十分対応できるのではないかと考えております。

また、現実的に農業高校に来る生徒は、多様な子供が増えて来ておりますけれども、そういう子供が、例えば生命体を扱う勉強とか栽培飼育に携わるとか、現実私どもの方にも馬術部とか、そういうものをやることによってそういうものが改善されているということもありますので、農業の持つ多様性といえますか農業教育の持つ多様性などをいかに発揮して、できれ

ばこの会議を通して私はそういう視点からとらえていきたいと思っておりますので、今後ともよろしくお願いいたします。以上であります。

荒井会長 ありがとうございます。それでは続きまして、渡辺委員お願いいたします。

渡辺委員 宮城県町村会副会長、丸森町の町長の渡辺政巳でございます。

うちの町にも県立の伊具高校がございます。当初は農業高校でしたが、時代の変遷を経て現在は総合学科制を取り入れており、生徒のいいところを伸ばすという点で良くなったと思っています。また同校では、役場や町内企業を対象に職場体験実習を実施しており、生徒の進路決定にもいい影響を与えるのではないかと考えています。

子どもを取り巻く環境は、高度経済成長時代のひずみ等があって以前とは大分変わってきて、今は一生懸命努力しなくてもお金や物に不自由せずに暮らせるような時代になっていると感じており、それが若者の意欲減退にもつながっているのではないかと考えています。社会の責任として、たとえば18歳になったら親元を離れて一人で暮らすことができるようにする教育が必要ではないかというのが私の持論でありまして、義務教育のみならず高等教育においてもそのようなことを考えながら検討を進めなくてはならないと思います。

それから、生徒の個性を伸ばす学校づくりも必要ではないかと思うんです。どうしても今は学歴ということになっていますけれども、その中においても、それぞれが持っている力を引き出してやりながら、いろいろな職業に就職できるような、目標を持って取り組める学校づくりが求められるところだろうと思っております。

さらに最近感じるのは、国際社会に対応できる人材が必要だということです。企業もどんどん外国に進出する時代が来て、本当に今の若い人たちが外国で暮らせるのかと、心配になります。先にも述べたように、何不自由ない生活をしている人が急に外国で暮らせるとは思えないんです。ですから、このようなことも考えながら教育現場を整理していかなくてはならないのではないかと考えております。

ただ、少子化により、当町の伊具高校も将来存在しているかどうか心配していますが、学校があるのとなないのでは町にとっても大分違うわけでありまして、地域や町の環境をよくしていく中で、生徒もいい環境の中で学んで欲しいという思いがあります。当然、社会、家庭、学校と連携しなくてはならないという現実がございますので、その面も含めて今後皆さんと議論していければと思っております。よろしくお願いいたします。

荒井会長 ありがとうございます。それでは、白幡委員お願いいたします。

白幡（勝）委員 気仙沼市の教育委員会の白幡でございます。

実は私、3年ほど前まで高等学校の現場におりまして、2つの学校の統合にかかわってきたいきさつがございました。気仙沼高等学校と鼎が浦高等学校との統合であったわけですが、当時はかなり大きな問題を引き起こしたのですが、現在、生徒数が減ってくる中で、多くの方々がこの統合を妥当でいいものだったと評価されていると私は感じております。

再配置を含めて高等学校の合併や統合は、生徒のニーズや地域のニーズに合ったものをきちりおこなっていけば、地域からも感謝されるものになるのではないかと考えております。

しかしながら、現在、宮城県は1学区制に移行しようとしているわけで、そのような中では、高等学校の評価によって生徒の移動が起こると思います。生徒は現在の状況でも数年で学校が変わるくらい移動してしまいます。そのことを考えますと、学校の設置場所や運営のしかたについては、本当に求められているものになっているのかどうか、よほど考えてつくり、取組んでいかなければならないのではないかと考えております。

そこで、さまざまな背景を考えて議論しなければならないと考えているわけですが、私は資料の外部環境については不足するものがあるのではないかと考えております。

私立高校もじつは公立高校とのかかわりに大きな位置を占めるのですが、そのようなことも意識しながら話ことも必要であろうと思いますし、また大学とのかかわりも高校の配置に影響を与えるような気がしています。

高校のことを議論すればいいというのではなく、もう少し高校のあり方を位置づけていくことが必要なのではないかと考えております。

さまざまな議論に参加させていただくわけで、どうぞよろしくお願いいたします。

荒井会長 ありがとうございます。それでは、小澤委員お願いいたします。

小澤委員 利府町教育委員会の小澤でございます。このたびは町村教育長会議を代表して出席させていただいております。

私は今回いただいた資料に目を通しておりましてあることに気づきました。それは県立高校と地域との関係であります。これまでの10年間と今後は、大きく子供たちの数が減ってくるということは論をまちません。しかしながら、今の国の考えもそうでありますけれども、今的な考えとしては中央の方だけを見ておりますけれども、果たして10年20年あるいは30年というスパンで考えた場合、地域といったものをしっかりとつくっていかないと、この日本はどうなるのかという大きな問題があります。実は、これからの県立高校と地域はそういう関係の上に成り立っていることも見逃しはできません。そういう意味で、地域から高等学校が支持をされるということがまず第一条件です。やがて全県1学区になって大きく地域から中央に子供

たちが流れますけれども、そういうふうになっても、その地域の伝統校や拠点校といったものが地域から支持され、あるいは、子供たちからあこがれのまなざしをもってその学校に入りたいという目線で見られるような学校づくりをしていくことであります。そうすることによって、全県1学区になっても地域の学校が恐れることはありません。

一つの例を申し上げますと、利府町では十符っ子ブラザーシップという組織をつくっております。いわゆる町の最上学年の利府高校生をお兄さん・お姉さんとしております。その下に養護学校、それから小中学校が9校、合わせて11校でありますけれども、この異年齢集団を立ち上げて4年目になりました。そこで一つの活動は、その異年齢集団は、地域の人やお互い会っても、朝、帰り、あいさつをしようということであります。小学生が朝、利府高校の生徒に「おはようございます」と大きな声であいさつをする。自転車で行く利府高校生は、「おお、しっかり頑張れよ」とか「気をつけて行けよ」という声かけが普通に行われている。きのうも、9月に行われる、町内の6校の小学校とスポーツ科学科の生徒が同じ日に出向いて交流事業を高校生みずからがします。そのときの子供たちの喜びようは本当にすばらしい。先生方とは違った高等学校の生徒へのあこがれや尊敬のまなざしがそこにあるんです。そういうふうな、高校側が地域に立って何ができるかということを今回は考えていく必要があるのではないかと。高等学校に対して地域はもっともっと協力していく体制が必要なのではないかと。高等学校の考えや方針を地域が拘束してはならない。しかしながら、地域はそれをしっかり教育していく体制が必要だと思えます。そういう意味で、これからのまちづくりや将来を見据えた場合には、高等学校というのは、今高校野球でも連日のように我が町の学校はどうなっているのかという目線がありますけれども、地域の学校が元気があると地域も一緒に元気が出てくる、そういう状況になりますから、ぜひ地域に対してもこれまで以上に目を配る必要があると感じております。

荒井会長 ありがとうございます。協力を感謝いたします。大変貴重な、そしてそれぞれの立場を踏まえた示唆に富んだご意見をいただきましてありがとうございます。

最後に、私のほうから簡単に発言をさせていただきます。会長としてではなく、委員の一人としての意見でございます。2点申し上げます。

第1は、白幡委員も仰ったことですが、審議は今後のあり方の議論だけでよいのか、という点です。これまでの経過をきちんと踏まえる必要がある、そこに大事な問題が隠されているかもしれない、ということでございます。それを重視したいと思えます。

それからもう1点は、いかに宮城県という枠、高校という枠を超えるかということです。

宮城県の高校の将来構想ですが、宮城県という地域の枠をこえた発想、視点が必要のように思います。また高校の将来構想ですが、外部環境、社会との関係が重要です。そのためには高校という枠を超える視点が必要です。できるだけ外側からの目を大事にすることが重要です。

余計なことを申し上げますが、私は現在、東北大学の教育学部におりますが、教育学部の出身ではありません。東北大学の出身でもなく、また宮城県の出身でもありません。小林教育長はいま人選を誤ったかな（笑）とお思いになっているかもしれませんが、私の経歴は、外側に立って宮城県の高校の将来構想を考えるのに、意外にメリットがあるかもしれません。その点を大事にしてこれからの審議に参加したいと考えています。

司会の不手際で、時刻が予定時刻のぎりぎりになりましたけれども、この辺で会議を終了したいと思います。議事進行につきまして、皆様のご協力に感謝いたします。それでは、事務局にマイクをお返しいたします。

#### 4 その他

司会 大変短い時間の中、ありがとうございました。

本日、時間の都合でご発言ができなかったご意見ございましたら、ただいま紙をお配りしておりますが、この紙にお書きいただきまして、郵送、ファクス、メールなりで当教育企画室事務局の方までお送りいただければと存じます。大変本当に短い時間、恐縮でございました。

最後に次回の審議会の日程でございますが、先ほど資料5でもご説明申し上げましたが8月下旬を予定してございます。詳細な日程につきましては、これから会長と相談の上、皆様方にご連絡を申し上げたいと存じます。事務局からそのような形でのご連絡を申し上げます。よろしく願いいたします。

#### 5 閉 会

司会 それでは、以上をもちまして第1回県立高等学校将来構想審議会を終了させていただきます。

本日は大変ご苦労さまでございました。